

0 柳田國男と民俗学導入

民俗学→「前代に拘束された」「ありふれた『日常』に対して」「『生活疑問』を挟む」学問

自明性への疑い→内省的行為・「自己省察の学」（柳田國男『民間伝承論』）

「問いを立てる」・「解の導き方を考える」 × 解を求める

現代民俗学→現代は「前代の拘束・前代からの伝達」（慣習）以上に「文化の同時代的大量伝達」

（流行）によって規定されており、この中での民俗学の意義を考えることが肝要

A 民俗学について

習慣・仕来りなどに見なされ普段は疑問を挟むことのないような日常のありふれた事柄に対し持続的な問いかけを行いそれによる知の集積によって成立した「科学」

初期→習俗を前代からの残存形態と推論し類似の事象を「飛び石的」に結びつけそれらを不易で

本質的なものと見なし「伝統」と考えるようなロマン主義的解釈（連続性を主張）

近年→産業革命以後の「喪失したものに対する愛惜」という近代的感性に基づく「表層的伝統化

志向」に対する人々の接触・愛着という現象への指示や問いかけを行うフォークロリズム

（本質主義：伝統を不変なものとする⇔構築主義：伝統は変化しながら構築されたものとする）

B 『遠野物語』（柳田國男）について

① 「聞きたるまま」でなく「感じたるまま」を記述

② 擬古文や写生文を用いた記述

③ 遠野物語における各話の構成と分類

→眼前の「事実」（主観的事実）を記述

→遠野の人々の「リアリティ」の記述

→[事実/幻想]・[日常/非日常]の4つの組み合わせの中で

連続性を持って混在・累積する各話の構成（重層性）と

そこに見られる「リアリティ」の記述

→現実（＝客観的事実）とリアリティの関係性（ありふれた「生活事実」と人々の「語り」の間）

④ 「遠方的一致」→外部からの文化の摂取、環境・条件・社会状況の変化に伴う文化の改変

※『森のフォークロア』（アルブレヒト・レーマン）

ドイツ人にとっての「森」という存在の「語り」を通じた分析

→森の表象・森の役割・人々の森の「情報」の獲得過程・人々の森への意識やその形成過程

→1980年代以降の「森の死」という予言に対する生成導入の過程やそれへの判断

→庶民の「日常」の客観的事実（現実）と人々の「語り」の中にある主観的事実（リアリティ）

C 初期の民俗学とナウマン・柳田の思考

初期の民俗学→習俗を前代からの残存形態と推論し類似の事象を「飛び石的」に結びつけそれら

を不易で本質的なものと見なし「伝統」と考えるようなロマン主義的解釈

→本質主義（伝統を不変なものとする）とも通ずる解釈・考え方

→ドイツでは「民族の魂」としての民謡・童話と結びつけられナチズムも利用

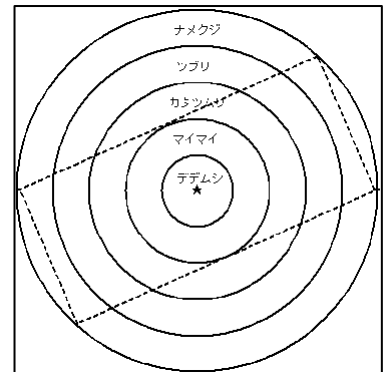
（壮大な理論（文化圏説など）：歴史の飛び石的な結びつけとその理論化・学問化）



ナウマンの沈降文化論→都市で形成された文化が地方に「沈降」する形で伝播するという考え方
柳田の圏論（標準文化論）→中央の支配者が作り出した文化が地方に波及するという考え方

※『蝸牛考』（柳田國男）から見る圏論（右図参照）

カタツムリを表す語が時代とともに中央で作られた後周辺地域へと波及してゆく様を図式化したものである。歴史的に見ると「ナメクジ」「ツブリ」「カタツムリ」「マイマイ」「デデムシ」の順に語が中央で作られ周辺地域に波及したことがわかる。



C' 初期の民俗学とナウマン・柳田の思考のまとめ

初期民俗学→歴史を飛び石的に結びつけそれが余りにも大きな理論や学問として形成され利用されたが、歴史の分析が甘く過度な飛躍が後に批判の対象となった

ナウマン・柳田→精緻な歴史分析のもとに「日常」の積み重ねの中で民俗が形成されると考えた
加えて「民俗」のみならず庶民の暮らしなど担い手としての「民」を考慮した
（民俗学を超えた「民学」的な考え方の発生）

D 近年の民俗学のあり方

Folklore から Volkskunde へ

→庶民の暮らしへの仔細な着目とそのデータの蓄積、「民」による主観的な語りへの着目
→文化や生活を総体的に（holistic）把握しつつその総体的なコンテクストの中で捉え直す
→庶民の暮らしや生活文化への「なぜ」という問いかけ（柳田國男の言う「生活疑問」）

※ 郷土「を」研究するのではなく郷土「で」研究しようとした（郷土会）

1 清潔と近代（風呂にまつわる日常）

マクファーレン→イングランドとの比較において洗淨の視角と頻度の量的観点を初めて導入
→身体の装い方自体（質）に着目（型ではないより根本的な部分）→総体的
→文化は連綿とした伝統ではなく文脈（コンテクスト）の中で捉えられる
→外部的通文化的 etic な客観点と内在的文化相對主義的 emic な主観点

※ マクファーレンの研究→マルサス『人口論』の公理に反する事実とその要因の総体的把握
→イングランドと日本の清潔観・衛生観を論点として比較研究

文化は静的なものではなく、いかなる場合においても変遷はあり、留まっていることはない。

A 風呂と日本人とその観察

- ・欧米人が見た前近代の衣生活

→マクファーレンは肉体労働の日常生活のもとで衣類がどれほど着られているかを提起

- ・日本特有の衣服の使い分け→仕事着・普段着・晴れ着
- ・肌着革命→古着の活用から身ごなしの変化、肌着の導入で清潔と保温が可能に
- ・洗濯とけがれ→衣服の種類と洗濯頻度の差

→仕事着は洗濯しない、普段着・晴れ着は見える汚れを部分洗い・見えない穢れは丸洗い

外国人研究者→日本人は毎日入浴する風呂好きな国民であり風呂に毎日入る習慣を持つ

日本人研究者→東日本でも数日に一回、西日本では一月に一回程度しか風呂に入らない

→入浴を日本人の風呂好きの性質や日本人の清潔の象徴にまで飛ばすことは果たして適当か？

外国人研究→風呂の条件形態への言及が弱い（銭湯は垢をかき共用の豊富な湯に浮かべる場所）

日本人の風呂→垢をかき共用の豊富な湯に浮かべる場所＝毎日行うには適さない行為

→他にも身体を温める目的・日読みなど占卜目的・宗教的目的（穢れ）などがある

→一種の丸洗い（見える「汚れ」と見えない「穢れ」を丸ごと払うための行為）

外国人が見た日本人の風呂→欧州では体の清潔がよいという価値観が絶対的ではなく（むしろ

よくないとされ）、しかしコレラ流行以降に衛生・清潔意識が誕生

した中で、日本人の「人目を恐れず裸で度々体を洗う」姿は、外国

人には異質に感じられ、日本人は清潔好きだと捉えられた

日本人の風呂と皮膚病→「世界の盲目国」（不潔非衛生的な銭湯→近代衛生思想の啓蒙が肝要）

日本人の風呂と衛生事情→明治以降不潔非衛生的な浴室環境を近代衛生思想の下行政指導で改造

→風呂（入浴）習慣も改造（個別風呂・毎日入浴・洗浄など）

B 日本人清潔意識の自己表象化

『国民性十論』（芳賀矢一）の一節

→「我國民は清潔を愛する民族である」「日本人の様に盛に全身浴をする國民は外にあるまい」

→当時の地方改良運動における郷土愛「布教」、身体的汚れと精神的汚れの同一視、下層階級の清潔

→「清潔」「きれい」とはそもそも何か？

C 「きれい」とは？

→美しいこと・汚れがないこと・斉一であること

→整列感・統一感・秩序性などから見られる外見だけの清潔願望

（例：なぜ平積みの雑誌の二冊目以降を人々は取ろうとするのか？）

→外見的な汚れより目に見えない穢れに対する忌避や潔癖感が近代の科学的知識を通して体現

（例：エンガチョ→不浄なもの（穢れ）の伝染を防ぐための呪い）

→斉一は「少数への許容なく集団が一定方向に進むこと」を志向し迷惑をかけない概念と通ずる

（例：「迷惑をかけない＝往生際がきれい」というところでの斉一ときれいの結びつき）

D 住宅と清潔と生活

都市部の大量の住宅需要にこたえる形で作られた公団住宅には、内風呂（浴室）・水洗トイレ・ダイニングキッチンなどが設けられ、「不衛生」と考えられたことが解消されそれらが量産規格化・低コスト化されたことで、「清潔で衛生的な暮らし」が普及・日常化した。

E 日常生活に対する研究

例1：「サルリムサリ」調査

例2：ヘルマン・パウジンガー『科学技術世界のなかの民俗文化』

→日常生活に目を向けた民俗学（民衆の些細な客観的事実と語りの中にある主観的事実）

2 民俗とその周辺

A 民俗という言葉

中世を含む昔の日本では民俗の語は使用されず風俗の語が使用された

(風俗→衣食住の「衣」を中心とした民衆生活に着目する言葉だがその意味用法は常に変化)

例：『類聚国史』(菅原道真)

200 巻のうち 190 巻は風俗に関する記述、他には殊俗に関する記述など

風俗→天皇教化対象となる民族に関する習俗 殊俗→天皇教化対象とならぬ民族に関する習俗

例：『府県史』(明治期に国史編纂のために作られた政治色の強い書物)

当時は明治維新や文明開化の中で地方の古い行事(例えば盆踊りや道祖神祀りなど)は廃止すべき対象とみなされており、また廃仏毀釈が進み仏教行事から神前行事へと転換が迫られていた

(例えば神社合祀が急速に進んだことの背景にはこのことが関係している)

→日露戦争後には地方改良運動が進められるようになったが、このあたりから民俗という言葉が生じ始めるようになる。明治政府のもとで退廃した行事などに対する意識(この意識は仏教と神道の融合文化に対する価値付けでもあり明治期からの価値観の逆転をもたらしている)の中で生じた民俗という言葉は、「民情風俗」を縮めた語または民衆生活全体をさした語として扱われるようになった。この頃になると、従来の「集落」に対するアイデンティティから「日本」に対するアイデンティティへの変化が民衆にも見られるようになり、積極的に地方文化運動が行われるようになった。昭和になると政府によって掲げられた国体の本義(政府が国民に精神を教え込むために日本の国史に依拠して作ったもの)の中でも民俗の語は見られるようになった。

B 文化の「伝統化」と柳田國男

・文化という言葉の意味(大辞林)

1 社会を構成する人々によって習得・共有・伝達される行動様式・生活様式の総体

→個別文化の間には高低・優劣の差はないとする(アメリカ的)

2 精神活動によって生み出されたもの(ドイツ的)

3 生活が便利で快適なものになること(東アジア的)

・柳田國男における「文化」の解釈

→大政翼賛会が進めた地方文化運動に対する批判を中心とした「文化」に関する議論

→文化は「変化」であり持って生まれるものではなく伝統とは異なるものである

→文化の一要素でしかないものを「文化」と言い切ってしまう傾向に対する批判

→都市文化と地方文化が二者択一のものとして扱われることへの批判(文化を都市の独占とすることもおかしいが、その地方支配に対する抵抗を地方文化とすることもまたおかしい)

C 日本の二つの民俗学

1『民俗』(芳賀矢一・内務省系統)→上からのナショナリズム

→ドイツのハイマートクンデに由来し国家のイデオログとして愛国心・愛郷心を述べる

2『郷土研究』(柳田國男・農商務省系統)→下からのナショナリズム

→現場中心に問題を立ち上げ現在の問題を緻密に考える(新渡戸稲造の地方学からの流れ)

D 近代日本の文化政策

→廃仏毀釈以降の文明開化の文化政策の文脈では地方の野卑な「民俗」は「文」によって教化される

- 1 1910年代の地方改良運動→神社合祀（神社は国家の宗祀→神社の公的地位確立）
- 2 1920年代の民力涵養運動→「国民儀礼」の創出
- 3 1930年代の郷土教育運動→共同体の美しさ（科学性から転換←昭和恐慌）→平準化全体主義化
- 4 1940年代の地方文化運動（大政翼賛会）→「正しき日本文化は地方文化に存す」

→神祇院体制（国民儀礼創出の流れからの儀礼国家化、沈降文化論の逆転的受容・基層文化論）

※ 大政翼賛会→翼賛文化運動における地方文化の重視（伝統と結びつけた文化論）

→大東亜共栄圏の大東亜文化樹立と並行して行われた地方文化運動

→「国体の本義」で昭和研究会の「東亜協同体論」や「五族協和」に基づく文化指導の立場の主張

E 伝統という言葉

伝統→前代までの当事者がしてきたことを後継者が自覚と誇りをもって受け継ぐところのもの

元来は「血筋を伝える」の意味→「古くからのしきたり・精神的誇りを伝える」の意味に変化

例：国語辞典での出現

明治期は「受け伝えている系統」、大正期は「古くから歴史的に伝わっている系統」や「昔からの型にはまった習慣」、昭和期は「歴史的に発達した文化」

例：tradition の英和辞典での出現

明治前期は「言い伝え」、明治中期は「古くからの言い伝えやしきたり」、明治後期は「伝統・因習の墨守（ただし traditionalism での出現）」

→伝統は国民国家の形成時に大量生産されたもの（『創られた伝統』）

→伝統を再確認する動きは近代化に伴いかえって強化された

F 戦後民俗学の定義と標準文化論

民間伝承を通して生活変遷の跡を追う（柳田國男）、民族文化を明らかにする（和歌森太郎）

例：1971年民俗学会

→民間伝承を素材に民俗社会文化の歴史的由来を明らかにし民族の基層文化の性格と本質を究明

→世代的連続性を重視した形での定義、戦時中の神祇院体制を汲んでしまった形での定義

例：柳田國男の標準文化論

→中央都市からの「文化普及の法則」・文化普及の装置としての都市の役割

例：柳田民俗学と日常の科学

→事象そのものを現象とする＝当たり前と言われていることのその奥の真理を洞察する

→当たり前だと思われていることがなぜ当たり前なのかを問う「日常の科学」としての民俗学

3 フォークロリズムとファルケンシュタインの原則

A フォークロリズム導入

→「民俗文化要素の流用や書き割りの演出（伝統らしさの振る舞い）またそのようなものへの現代人の執着やノスタルジー感覚（伝統らしさへの志向）」に「なぜ」を問いかける枠組み。

※ 文化理解のいろいろ

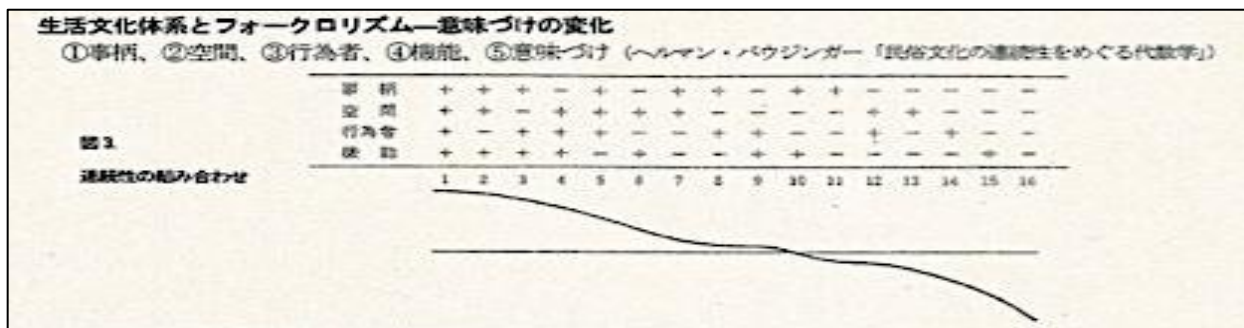
① 本質主義→起源にまでさかのぼれる形で伝統が連綿として存続維持されているという認識。

② 構築主義→伝統は作られたものであるという認識。

※ 文化ナショナリズム→歴史的過程を越え現在と過去を媒介させる論理を作ろうとする考え。

→日本の「年中行事」と呼ばれるもの（素朴に見えるもの）を古くから連綿として続いているものであったり地方発祥のものであったりと誤認している。（実は都市で生じた伝統化志向の産物）

※ バウジンガーの連続性議論（事柄・空間・行為者・機能・意味付けの5要素から伝統を判断）



→10番（事柄と機能が残る）と11番（事柄のみが残る）の間には差があり、11番の問題点をバウジンガーは指摘している。（機能が失われたものの連続性の低さ）

B ファルケンシュタインの原則

・現代ドイツ民俗学の定義

→民俗学は客体及び主体に表れた文化的価値ある伝達物（及びそれを規定する原因とそれに付随する過程）を分析する。この分析の出発点は、一般に社会文化的な諸問題であり、その目的は社会文化的な諸問題の解決に寄与することにある。

→① ナチス民俗学と深い結びつきのある「連続性」への志向の切断

→② 方法論的強化の実施（精緻な歴史分析）→科学技術による民俗文化の退縮の考え方を変革

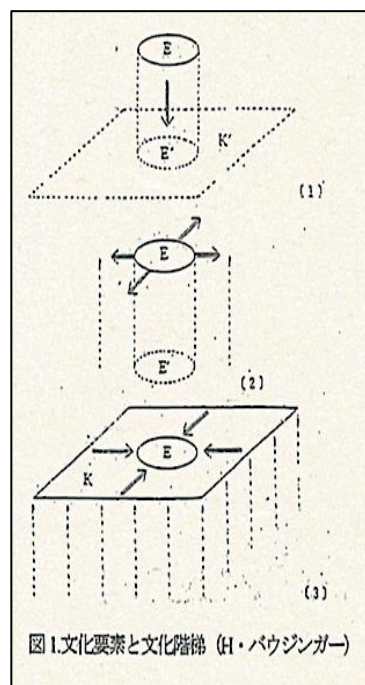
→③ 「民俗学は批判的社会系科学に変換されるべき」

→民俗学は客観的表出や主観的表出に見られる文化的諸価値の伝達を詳細に検討するものとする。その目的は、社会文化的な諸問題の解決に寄与することにある。

→民俗学は文化形態の移転と起源、及び移転のプロセスを分析するものである。文化形態の指標となるのは文化的な価値観である。こうした価値観はモノ（物質文化）とか規範として客観的に表出されるとともに、主観的にも表出される。民俗学の目標は、社会・文化的諸問題の解決法を見出すことに貢献することにある。

・バウジンガーの「現代民俗学の輪郭」（現代の射程の入れ方）

①→今ある文化要素を過去の文化的階梯に投影するモデル



(現代の文化にある要素 E は過去の文化的階梯に由来しそこに要素 E を投影できるとする考え方)

②→機能主義的残存理論 (領域的境界の設定により連続性を浮かび上がらせようとする考え方)

(要素 E は過去の文化的階梯に由来するが境界を設定すると連続性が表出し現代への問いに繋がる)

③→今ある文化要素を現代の文化の枠組みの中で捉えるモデル

(要素 E は現代の文化的階梯の中で捉えられるとする考え方・歴史的な捉え方を否定はしない)

例：家族内事件の物語化

① 事実とリアリティの乖離

・文化内の価値規範に沿ってニュースが作られる→似た状況への語り方に文化的差異が見られる

② 儀礼としてのコミュニケーションモデル

・語りには事実の説明伝達のみならず内容の意味や解釈を与える作用がある

・語りは象徴的システムとしての解釈枠組み・文化的価値モデルを提供する＝リアリティの修復

・現代マスメディアにおける勢力と報道→小事件は「語られない」

③ 事件を見るまなざし

・物語化は事件を捉える解釈枠組みの歴史的変化であり事件に対する「意味付け」の変化である

※ 日本の社会規範と親子心中

養育棄児の激減と「迷惑」の社会規範→居候・家居に対する「厄介者」の扱い

民力涵養運動の中での「迷惑」の社会規範→捨て子・子だけ残すことへのためらい→心中増加

近年の「迷惑」の社会規範→家族までに範囲が広がり孤独死・墓じまいなどに関係

問題 0

柳田國男の言う「民俗学」について、講義内容に基づきながら、詳しく論じなさい。

答例 0

柳田國男は、「前代に拘束された、ありふれた『日常』に対して『生活疑問』を挟む学問」と定め、自明性への疑いの中に見える内省から「自己省察の学」と彼の著書『民間伝承論』の中で言い表しもしている。初期の民俗学では、習俗を前代から残存し不変なままの形態であると考えたいわゆる「本質主義」の立場をとっており、歴史上の類似現象を「飛び石的」に結びつけ連続性を主張する「ロマン主義」的な解釈をとっていた。このような考えは、ドイツで「民族の魂」として民謡・童話を捉えられたりナチズムに利用されたりと、波及するようになり、壮大な理論として存在するようになってゆき、シュリーマンによるハーケンクロイツの発見などはこの理論にさらなる拍車をかけるものになった。しかし、この考え方には緻密な歴史分析がなく飛躍も過ぎたため最終的に批判された。柳田と同時代に生きたナウマンは、都市で形成された文化が地方に沈降する形で広がる「沈降文化論」を提唱したが、ほぼ同時期に柳田は、中央の支配者が作り出した文化が地方に広がる「圏論」を彼の著書『蝸牛考』の中で述べている。柳田は、初期の民俗学がとっていたような歴史の類似現象を「飛び石的」に結びつける方法ではなく、習俗は「日常」の累積の中で形成されるという考えに立脚し、緻密な歴史分析の中で「日常」へ眼差しを向けることの重要性を説いた上で民俗学を定義した。また、この考え方に基づけば、習俗・民俗のみならず「日常」の担い手である「民」やその「語り」も重要になるため、柳田はこれら庶民の生活のような担い手としての「民」の存在を考慮する「民学」的立場も取り入れさらに「民」の「語り」にも目を向けるようになった。この姿勢は彼の著書『遠野物語』にもよく表れている。彼はこの中で、「感じたままの記述」や「擬古文・写生文による記述」を行い、また物語自体の構成も事実と幻想・日常と非日常を織り交ぜたような形になっている。彼自身はここでは「眼前の『事実』」を述べたと記しているが、実際「感じたままの記述」であるため、客観的事実としての現実を描いたわけではないことは自明である。ただ、柳田が描いたのは主観的事実でありそれは「リアリティ」である。柳田が描いた遠野の習俗にはもちろん「生活事実」としての客観的事実すなわち現実が存在する一方で、遠野で生活する人々の「語り」を描くことでそこに見られる主観的事実すなわち「リアリティ」も柳田は描いている。彼はこのような客観的事実と主観的事実の関係性を重要視しようとしていたのである。このように『遠野物語』の中に柳田の民俗学の姿勢を見ることができる。また、彼は『遠野物語』の後に「遠方の一致」の考えを巡らせている。彼は遠野の習俗の中に他地域の習俗との類似性を見出しており、ここから遠野の文化が遠野の中で完結しているのではなく、外部からの文化の「摂取」や環境条件や社会状況に応じた工夫ある変化の累積の中で構築されたとするある種の「構築主義」的な立場をとるようになった。以上から、柳田國男は、民俗を作り上げている、変化しつつも累積された、ありふれた「日常」に対し問いを立てそこにいる「民」や「語り」に耳を傾けつつ客観的事実と主観的事実の関係性を考慮して生活文化を総体的に捉え直す学問を民俗学とした。

問題 1

現在の日本では、日本人は風呂好きだとか清潔な民族だといった自己表象化がよくなされるが、入浴法や入浴頻度、風呂の構造など、庶民生活の実態から、その神話化の過程を論じなさい。

答例 1

日本の入浴に関して、洗浄という視角と頻度の量的観点を初めて導入したのはマクファーレンであり、彼は日本とイングランドとの比較において身体の装い方の質を総体的に捉えることで両国の清潔観や衛生観を論点に研究を行った。マクファーレンは、日本において肉体労働の日常生活のもとで衣類がどれほど着られているのかを提起し、日本で特有の衣服の使い分けである仕事着・普段着・晴れ着に着目し、衣服の種類と洗濯頻度の差に相関があることに目を向けた。例えば、仕事着では洗濯を行わないが、普段着・晴れ着では見える汚れは部分洗い、見えない穢れは丸洗いというように、衣服の種類と洗濯頻度の差の相関には日本人の清潔観・衛生観が表れていた。実際の日本の入浴に対する考え方はこの価値観に沿っており、日本人にとっての入浴は垢をかき共用の豊富な湯に浮かべるという週1回程度の非日常的行為であり、見える汚れと見えない穢れを丸洗いするための行為であった。しかし、マクファーレンら外国人研究者においては、この入浴の形態に対する言及が弱かったことと、欧州における清潔に対する良いという価値観の非絶対性から、度々人目を恐れず裸で体を丸洗いする日本人に対して清潔好きという印象を抱いていった。ただ、実際には決して清潔と呼べる状況ではなく、不潔で非衛生な入浴は皮膚病の温床だったため、近代衛生思想のもと行政指導が行われ、銭湯という集団的かつ低頻度の入浴から個別風呂という個人的かつ毎日の入浴への習慣改造も行われた。このような改造は、外国人が抱いていた日本人が清潔好きという印象とあいまって日本人清潔意識の自己表象化を生んでいった。当時明治政府が実施していた地方改良運動が育んだ郷土愛の布教や、身体的汚れと精神的穢れの同一視、革命防止のための下層階級の清潔など、国主導の改革が行われたことで、芳賀矢一が『国民性十論』の中で、「我国民は清潔を愛する民族である」「日本人のように盛に全身浴をする国民は外にあるまい」と述べるまでに自己表象化された。

問題 2

日本における、きれいと清潔に対する語りの中にある生活世界を、多層性を踏まえ論じなさい。

答例 2

「きれい」という言葉には、美しいこと・汚れがないこと・斉一であることという3つの意味が存在する。「美しいこと」に見える日本人の「きれい」の価値観は、整列性・統一性・秩序性などの外見だけの清潔願望に帰着する。例えば、平積みの雑誌の2冊目以降を取ろうとする行為にはこの価値観が表れている。「汚れがないこと」に見える日本人の「きれい」の価値観は、外見的な汚れというよりも目に見えない穢れに対する忌避や潔癖感である。例えば、「エンガチヨ」という言葉は不浄な穢れに対する伝染防止のための呪いの言葉である。「斉一であること」に見える日本人の「きれい」の価値観は、集団が一定方向に進み迷惑をかけないようにしようという概念である。例えば、迷惑をかけないことは往生際がきれいとも言いここに結びつきが見られる。

問題 3

近代日本における「民俗」の語の用法の変遷を、民俗学という学問の生成も含め論じなさい。

答例 3

近代日本においては、明治維新や文明開化が進む中で盆踊りなどの地方の古くからの行事が廃止の対象とみなされており、また神社合祀などが進められ廃仏毀釈や神前行事への転換が行われていた。日露戦争後の地方改良運動はまさにその中心的運動であったが、この時期に「民俗」の語は生じ始めた。背景には廃止された地方の古くからの行事に対する意識があるが、当時の「民俗」の語の意味は「民情風俗」の略語であり民衆生活全体を指した語であった。地方改良運動などの諸改革によって日本人のアイデンティティは集落規模から国家規模に拡大してゆき、日本文化というものを意識する中で地方文化運動が行われると地方文化が重視されるようになった。地方文化が意識される中で「民俗」の語の意味合いも解釈が分かれ、内務省系統の芳賀矢一は『民俗』の中で上からのナショナリズムを提起し、ドイツのハイマートクンデに由来し国家のイデオログとしての愛国心・愛郷心の観点から「民俗」の語や民俗学について述べた一方で、農商務省系統の柳田國男は『郷土研究』の中で下からのナショナリズムを提起し、新渡戸稲造の地方学からの流れを継ぎ現場から問題を立ち上げ現在の問題を緻密に考えるという観点から「民俗」の語や民俗学について述べた。後者の柳田國男の流れを汲む形で第二次世界大戦以前は民間伝承の会が形成されたが、第二次世界大戦後の1949年には日本民俗学会が発足しそこから日本の民俗学が成立した。

問題 4

下記の文章は、1970年のドイツ民俗学会の年会における「民俗学」の再定義である。「ファルケンシュタインの原則」として知られているが、ヘルマン・パウジンガーが「現代民俗学の輪郭」(1984年)で、民俗文化の捉え方として模式化して示した図1もふまえて、この定義を、具体例を用いながら、詳しく説明しなさい。その際、図1の(1)(2)(3)の捉え方の相違についても言及すること。

「民俗学は客体及び主体に表れた文化的価値ある伝達物(及びそれを規定する原因とそれに付随する過程)を分析する。この分析の出発点は、一般に社会文化的な諸問題であり、その目的は社会文化的な諸問題の解決に寄与することにある。」

※ 以下の具体例を使うこと。

「近年、少年の親殺害急増とか児童虐待や悲惨な子殺し事件が相次ぐといった家庭崩壊を謳う言説が、マスメディアで盛んに報じられるが、こうした言説が生起するメカニズムについて論じなさい。」

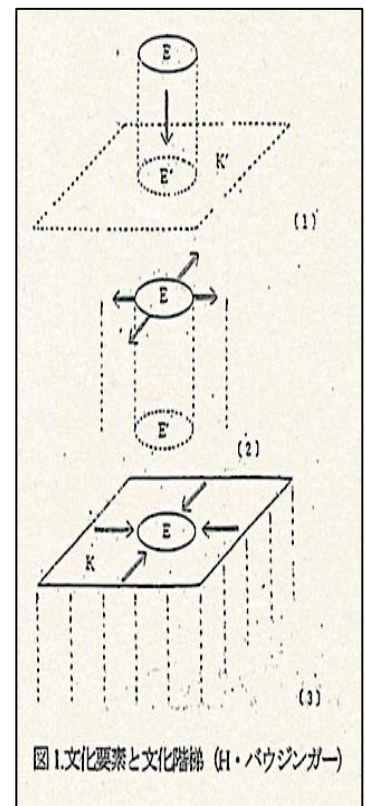


図1.文化要素と文化階梯 (H・パウジンガー)

答例 4

「ファルケンシュタインの原則」は、ナチス民俗学の反省から生じたドイツ民俗学の再定義である。ナチス民俗学に見られた過去からの連続性に対する志向を切断し、精緻な歴史分析という形での方法論的強化・批判的社会系科学としての民俗学の確立を図ったものである。バウジンガーのモデルでは民俗学が現代を捉える方法を3通り挙げている。(1)では現代の文化要素が過去の文化的階梯に由来すると考え、それに投影することで現代の文化要素を捉えようとしている。(2)では現代の文化要素が過去の文化的階梯に由来すると考えるが、そこに領域的境界を設けることで現代への連続性を浮かび上がらせ現代に繋がる問いを導こうとする機能主義的残存理論の考え方で現代の文化要素を捉えようとしている。(3)では現代の文化要素が現代の文化的階梯の中で捉えられると考えており、「ファルケンシュタインの原則」はまさにこの捉え方にあてはまるものである。「ファルケンシュタインの原則」において重要視されたのは、文化形態の起源と移転とそのプロセスを明らかにするにあたって、文化形態の指標となる文化的価値観を分析する際に、その価値観が客観的に表出されるのみならず主観的にも表出されるということであり、このような分析が社会文化的諸問題の解決に貢献するということである。この客観的事実としての「現実」と主観的事実としての「リアリティ」について具体的に考えることができる。日本の親子心中においては「迷惑」という価値観が大きく関与している。客観的事実としての親子心中の「事件」は、「迷惑」という価値観が民力涵養運動などの中で培われたことにより、捨て子などへのためらいから増加したものと考えられることができる。また、家族崩壊のニュースにおいては「語り」の作用が大きく関与している。主観的事実としての「語り」には、儀礼としてのコミュニケーションモデルによれば、意味解釈を与える作用・解釈の枠組みや文化的価値モデルを提供する作用・勢力の強いものだけを選択する作用があり、家族崩壊のニュースは文化的価値観に沿って作られ、事件の物語化は事件を捉える枠組みの歴史的变化とも言うことができる。このような具体例からも分かるように、社会文化的諸問題には客観的事実としての「現実」と主観的事実としての「リアリティ」が関わっており、それぞれ文化的価値観から表出したものだと考えることができ、「ファルケンシュタインの原則」ではその文化的価値観を分析することで文化形態の起源と移転とそのプロセスを明らかにし社会文化的諸問題の解決に寄与しようと考えた。

以下の設問、A群B群のなかから、それぞれ一題を選択し、計2題に答えなさい (なお、1問目の解答は解答用紙の表側に、2問目は裏側に記し、また各解答の最初には、選択した設問番号を書くこと)。

設問

A群 フォークロリズムの観点から、以下の設問のうち一題を選び、設問に答えなさい。

- ①現在の日本では、日本人は風呂好きだとか清潔な民族といった自己表象化がよくなされるが、入浴法 (身体の洗浄法) や入浴頻度、風呂の構造など、庶民生活の実態から、その神話化の過程について論じなさい。
 - ②ここ数年顕在化してきた、いわゆる昭和30年代ブームと呼ばれる現象に関し、それを美化する心情の生起するメカニズムについて、マスメディアの物語化作用もふまえて、論じなさい。
 - ③日本における初詣あるいは初日の出を拝する習俗の生成過程について、文化装置としての都市の機能も含めて、論じなさい。
 - ④近代日本における「民俗」概念の認識論的転換について、風俗/殊俗/民俗の区分もふまえて、論じなさい。
- 【以上、4つとも単なる事例的な説明ではなく、フォークロリズムの視点から、それを組み替えて論じること】

B群

①以下の文章は、柳田國男『先祖の話』の一節であり、彼の民俗学の立場をよく表している。彼が明治以降の神社行政に対して、何を問題視しているのか、特に下線を引いたところを中心に、詳細に論じなさい。

「はいおめでとうを交換したものであった。そうしてその神棚の神様は、実は何様であるかをはっきりと意識していなかったのである。ただ年の暮には伊勢の御祓の札が配られ、また土地の氏神社からも御札が渡り、それを神棚の上に納めることにしているから、大方はこの大小両方の神を拝むことになるのであろうと、漠然とそう思っただけであった。そういういっぺん加減なことはよろしくない。たしかに一国の宗廟を拝むものと心得よと、いったような勸説は行われているが、それはまったく新しい大改良であって、事実は少なくとも以前にはなかったことである。第一にそういう卑いおしるしを、戸ごとに配るということは、昔はもちろん今でもまだ望まれないことなのである。しかしともかくもこれに近い心持をもって、元朝に家の神を拝む人の数は、近頃になって急に多くなって来ていることだけは争わず、またそうやってしかるべきだという説にも傾聴の値はある。ただこれが日本国民の、年を迎える古来の慣習だったという風に、思わせようとすることだけは間違っているのである。幾度かの考え方の変化はあったと思われるが、まだ一度でも畏き一國の大神が、正月家々に来たり臨みたまうものと、信じていたことは我々にはなかった。そうして一方にはまた我々の正月の神は、必ず祝い慎しむ者の家を、個々に訪れ来られるものと考えられていた。」

②以下の文章は、近年刊行されたある概論書に記述された民俗学の定義であるが、柳田國男の構想した民俗学とはかなりの乖離があると思われる。問題点と思われる部分を3点ほど指摘し、その問題点のうち、一つについて詳細なる批判を加えなさい。

「民俗学とは、文字どおりには、民俗を研究対象とする学問であるが、「民俗」は「民間伝承」という語とほぼ同様であると考えられてきた。柳田國男は、はじめ民俗に相当する語として「郷土」もしくは「郷土生活」を用いており、これを研究する学問を郷土研究と呼んでいた。民俗学という呼称は明治の頃から使われていたが、異文化研究の民族学と同音の「ミンゾクガク」になるので、民俗学の体系化をはかる段階で、不必要な混乱を避けて「民間伝承」を採用したのである。全国的な学会組織として「民間伝承の会」が1935年(昭和10)に設立され、その後「日本民俗学会」と改称されたのは1949年のことである。民俗学という呼称が定着するようになるには曲折がみられたのである。

民俗学の研究対象である民俗の存在形態は多様であるが、ここで一応、つぎのように規定しておくことにしたい。すなわち、民俗とは、一定の地域で生活を営む人々が、その生活や生業形態の中から育み、伝承してきた生活文化やそれを支える思考様式である。と。このように民俗の性格を捉えるのは、伝統的な民俗のあり方が生業形態を営む場によって大きく規定される側面がみられるからである。山を生活の場とする狩猟・焼畑農耕・林業、海や川の漁業、里の稲作・畑作農耕、町の商業・諸職等によって、衣食住や年中行事、通婚圏、民間信仰などが異なり、人生観や世界観の差がみられる。また、家・村落や町・都市というように、生活空間の拡がりに応じて民俗のあり方が異なってくる。通婚圏とか交易圏、外部社会から訪れる人々との交流といったことも民俗のあり方を規定する要因となる。民俗は民間伝承と同義とされてきたように、民俗学は民間に伝承されてきた生活文化を研究対象としてきた。伝承という用語は、伝達・継承の短縮語とみられ、上位の世代から下位の世代へと何らかの事柄ないしは「もの」を伝達・継承する行為であると規定される。最近の例をあげれば、朝起きて顔を洗うこと、食事の作法、箸の持ち方、挨拶の仕方なども、世代間における伝承なのである。そして、この世に生をうけてから一定の年月にわたり、上位の世代によって育てられなければ自立できないという人間の存在のあり方そのものに伝承の成立基盤をもっているのである。

民俗学は、民俗つまり民間伝承を対象として、そのもつ意味をこまめに分析的考察を行い、生活文化を再構成する学問であるといえる。民俗学が日常生活のあり方を重視するのは、それが民族文化の基盤をなしており、この部分を究明することが日本文化の全体像を明らかにすることに寄与できると考えるからである。」

注意：以下の事項を守らない場合、不正行為とみなされることがある。

※学生証、時計、および筆記用具以外のものを机の上に置かない。筆入れなども鞆等にしま
鞆は机の中、脇の椅子または床の上に置く。

※携帯電話等を時計の代わりに使用してはならない。

※特に出題者からの持ち込み可の指定がないかぎり、教科書、参考書、ノート等は鞆にしま

※解答用紙や計算用紙は所定の枚数以上に取らない。

以下の設問のうち、設問A（全員解答）と、設問B群のなかから一題を選択した、計2題に答えなさい（なお、設問Aの解答は解答用紙の表側に、2問目は裏側に記し、また解答の最初には、選択した設問番号をB②のように書くこと）。

設問A

下記の文章は、1970 年のドイツ民俗学会年会における「民俗学」の再定義である。ファルケンシュタインの原則として知られているが、ハンス・ナウマンの二層化論や、ヘルマン・パウジンガーが「現代民俗学の輪郭」で示した図 1 もふまえて、この定義を、現代民俗学の観点から、より詳しく解説しなさい。図 1 の (1) (2) (3) の捉え方の相違についても、言及すること。

「民俗学は、客体及び主体に表われた文化的価値ある伝達物（及びそれを規定する原因とそれに付随する過程）を分析する。この分析の出発点は、一般に社会文化的な諸問題であり、その目的は社会的文化的な諸問題の解決に寄与することにある」

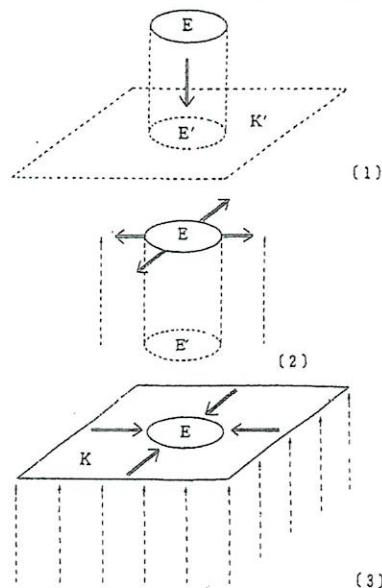


図1.文化要素と文化階梯

設問B群

民俗学者の現代文化の捉え方を、文化要素と文化階梯の関係性として模式化した上記の図1と、H. バウジンガーの「民俗文化の連続性をめぐる代数学」における、①事柄、②空間、③行為者、④機能、⑤意味づけのファクター分析(図2)に関する議論に基づいて、以下の設問のうち一題を選び、それを説明しなさい。

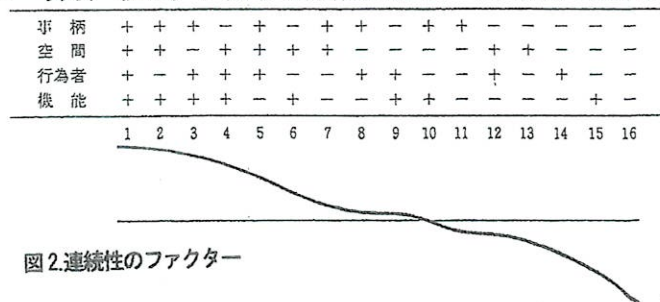


図 2.連続性のファクター



① 図3は、『新しい歴史教科書』(扶桑社)の「元禄期の文化」に続く「地方の生活文化」に掲載されている「民間のおもな年中行事」であるが、この図3の事例の採り上げ方について、その問題点を、事実誤認を生起させるメカニズムも含めて論じなさい。

② 現在の日本では、日本人は風呂好きだとか清潔な民族といった自己表象がよくなされるが、入浴法（身体の洗浄法）や入浴頻度、風呂の構造など、庶民生活の実態から、その神話化の過程について論じなさい。

③ 近年、「子どもが親を殺害する事件が相次ぐ」とか「児童虐待や悲惨な子殺し事件が急増した」といった「家族崩壊」を謳う言説が、マスメディアで盛んに報じられるが、こうした言説が生起するメカニズムについて、マスメディアの物語化作用もふまえて論じなさい。

④ ここ数年顕在化してきた、いわゆる昭和 30 年代ブームと呼ばれる現象に関し、それを美化する心情の生起するメカニズムについて、民俗学における事実とリアリティの関係性の議論もふまえて論じなさい。

以下の設問のうち、設問Aと設問Bの計2題に答えなさい（なお、設問Aの解答は解答用紙の表側に、2問目は裏側に記し、また解答の最初には、選択した番号をB②のように書くこと。あくまで解答の要点は設問A・Bであって、具体例ではない）。

設問A

下記の文章は、1970年のドイツ民俗学会年会における「民俗学」の再定義である。ファルケンシュタインの原則として知られているが、ヘルマン・バウジンガーが「現代民俗学の輪郭」で、民俗文化の捉え方として模式化した図1もふまえて、この定義を、具体例を挙げながら（下記の選択肢のうち1つを具体例に選ぶ）、詳しく説明しなさい。その際、図1の(1)(2)(3)の捉え方の相違についても言及すること。

「民俗学は、客体及び主体に表われた文化的価値ある伝達物（及びそれを規定する原因とそれに付随する過程）を分析する。この分析の出発点は、一般に社会文化的な諸問題であり、その目的は社会的文化的な諸問題の解決に寄与することにある」

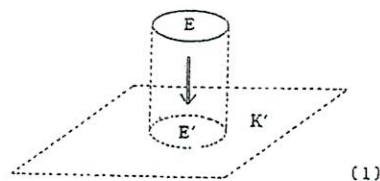
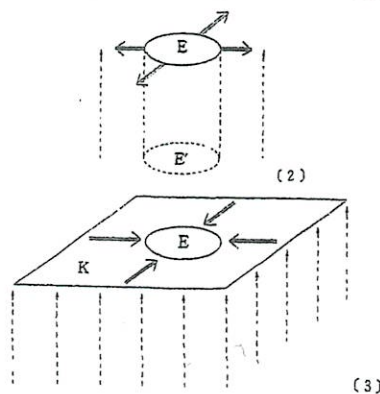


图 1

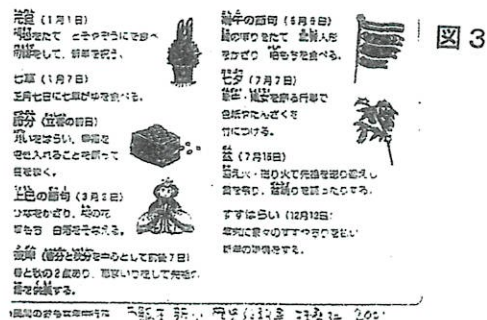


設問B

図2はH. バウジンガーが「民俗文化の連続性をめぐる代数学」で示した、〈連続性〉言説を解体するための模式図であるが、①事柄、②空間、③行為者、④機能、⑤意味づけのファクター分析に関して、具体例を示しながら（下記の選択肢のうち1つを具体例に選ぶが、設問Aで選択したものとは別なもの）、詳しく説明しなさい。また、その際、フォークロリズムに関しても言及すること（なお、設問Aの図1を、補足的に用いてもよい）

學	+	+	+	+	-	+	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-
術	+	+	-	+	+	+	+	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-
空	-	-	+	+	-	-	-	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-
行	+	+	+	+	-	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-
為																	
者																	
能																	
環																	
		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	

图 2



具体例の選択肢

- ① 現在の日本では、日本人は風呂好きだとか清潔な民族といった自己表象化がよくなされるが、入浴法（身体の洗浄法）や入浴頻度、風呂の構造など、庶民生活の実態から、その神話化の過程について。
- ② 図3は『新しい歴史教科書』の「元禄期の文化」に続く「地方の生活文化」に掲載されている「民間のおもな年中行事」であるが、図3の事例の採り上げ方の問題点について、事実誤認を生起させるメカニズムも含めて。
- ③ ここ10年来顕在化してきた、いわゆる昭和30年代ブームと呼ばれる現象に関し、それを美化する心情の生起するメカニズムについて、マスメディアの物語化作用もふまえて。
- ④ 近年、「子どもが親を殺害する事件が相次ぐ」とか「児童虐待や悲惨な子殺し事件が急増した」といった「家族崩壊」を謳う言説が、マスメディアで盛んに報じられるが、こうした言説が生起するメカニズムについて。

以下の設問のうち、設問Aと設問Bの計2題に答えなさい(なお、設問Aの解答は解答用紙の表側に、2問目は裏側に記し、解答の最初には、選択した番号をB②のように書くこと)。

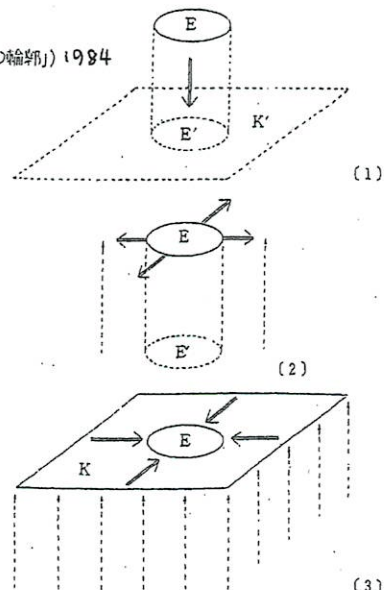
設問A

下記の文章は、1970年のドイツ民俗学会の年会における「民俗学」の再定義である。「ファルケンシュタインの原則」として知られているが、ヘルマン・パウジンガーが「現代民俗学の輪郭」(1984年)で、民俗文化の捉え方として模式化した示した図1もふまえて、この定義を、具体例を挙げながら(具体例は、設問Bの選択肢の中から選んでもよい)、詳しく説明しなさい。その際、図1の(1)(2)(3)の捉え方の相違についても言及すること。

「民俗学は、客体及び主体に表われた文化的価値ある伝達物(及びそれを規定する原因とそれに付随する過程)を分析する。この分析の出発点は、一般に社会文化的な諸問題であり、その目的は社会的文化的な諸問題の解決に寄与することにある」

図1.文化要素と文化階梯

(H. パウジンガー「現代民俗学の輪郭」) 1984



設問B

下記の問題①～⑩の中から、1問を選択し、具体例を挙げて、説明しなさい(設問Aの具体例で下記の選択肢を選んだ場合は、別な設問を選択すること)。

<p>先登 (1月1日) 門松をたて、とせやそうにを食べ、初詣をして、新年を祝う。</p> <p>七草 (1月7日) 正月七日に七草がゆを食べる。</p> <p>節分 (立春の前日) 災いをはらい、邪鬼を退せ入れることを願って、豆をまく。</p> <p>上巳の節句 (3月3日) ひなをがけり、桃の花、草もち、白濁をそなえる。</p> <p>彼岸 (春分と秋分を中心として前後7日) 春と秋の2度あり、墓まいりをして先祖の霊を供養する。</p>	<p>端午の節句 (5月5日) 菖のぼりをたて、武者人形をかざり、ちま子を食べる。</p> <p>七夕 (7月7日) 七夕、織女を祭る行事で、色紙やたんざくを竹につける。</p> <p>盆 (7月15日) 盆火・送り火で先祖を送り迎えし、霊を祭り、普請りを講たりする。</p> <p>すすきはらい (12月13日) 年末に家々のすすきを払い、新年の準備をする。</p>
--	--

図2「民間のおもな年中行事」西尾幹二ほか『新しい歴史教科書』2001

表1.日本と台湾の新聞報道における自殺形態の差異

	日本 (A新聞 年間)				中 華 民 国 (L新聞 年間)			
	男	女	人数計	件数	男	女	人数計	件数
車 数 自 殺	100	44	144	144	146	144	290	290
ベ ア 自 殺[心中]	34	38	72	36	17	24	41	20
う ち 夫 婦 心 中	(23)	(23)	(46)	(23)	(0)	(0)	(0)	(0)
他 殺・自 殺[無理由心中]	27	48	75	75	23	10	33	33
う ち 親 子 心 中	(13)	(45)	(58)	(58)	(0)	(6)	(6)	(6)
門 殺 総 数	161	130	291	255	186	178	364	343

林憲「精神文化の近代化比較からみた親子心中」(1982)

- 図2は『新しい歴史教科書』の「元禄期の文化」に続く「地方の生活文化」に掲載された「民間のおもな年中行事」であるが、事例の採り上げ方の問題点について、事実誤認を生起させるメカニズムを含めて論じなさい。その際、フォークロリズムの作用についても言及しなさい。
- 現在の日本では、日本人は風呂好きだとか清潔な民族といった自己表象化がよくなされるが、入浴法(身体の洗浄法)や入浴頻度、風呂の構造など、庶民生活の実態から、その神話化の過程について論じなさい。
- 元旦に初詣や初日の出を拝みに行く行為が、「創られた伝統」であることを、暦法の変化や神棚の常設化などもふまえて論じなさい。
- 近年、「少年の“親殺害”急増」とか「児童虐待や悲惨な子殺し事件が相次ぐ」といった「家族崩壊」を謳う言説が、マスメディアで盛んに報じられるが、こうした言説が生起するメカニズムについて論じなさい。
- 表1は台湾の文化精神医学者・林憲による、日本と台湾の新聞が報じる自殺形態の差異であるが、この表の説明から、日本と台湾の親子心中の違いを論じつつ、日本における大正末期からの激増について言及しなさい。
- 日露戦後の地方改良運動以降、内務省/文部省の、民力涵養運動、昭和初期の郷土教育運動、大政翼賛会の地方文化運動といった政策展開に対し、批判的な立場をとり続けた柳田國男の文化論を、対比的に論じなさい。
- 近代日本における「文化」という言葉の用法の変遷を、「伝統」という言葉の用法と対照しながら論じなさい。
- 近代日本における「民俗」という言葉の用法の変遷を、民俗学という学問の生成も含めて論じなさい。
- 日本における、きれいと清潔に対する語りの中にある生活世界を、その多層性をふまえながら、論じなさい。
- 日本の戦後民俗学がハンス・サウマンの沈降文化論を誤謬的に受容したことに関して、柳田國男の標準文化論も説明しつつ、論じなさい。
- 日本住宅公団(いわゆる公団住宅、団地)の住宅設備やその住まい方が、現在の私たち多くの日本人の暮らしや立ち居振る舞いに与えた影響を、日常化のプロセスあるいはヴァナキュラーな日常実践として論及しなさい。